

ぼくが燃えてしまう

岡本文良・作
山中冬児・画



ぽくが燃えてしまう

岡本文良・作 山中冬児・画



913 岡本文良

ぼくが燃えてしまう

金の星社 1984

190 P 20cm

(文学の扉 9)

●ぼくが燃えてしまう

初版発行 一九八四年九月©

作者／岡本文良

画家／山中冬児

発行所／株式会社 金の星社

〒111 東京都台東区小島一―四―三

電話・東京(〇三)八六一―一八六一(代表)

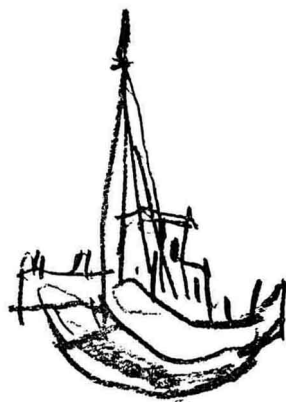
振替・東京〇―六四六七八

印刷・製本／ケイ エム エス

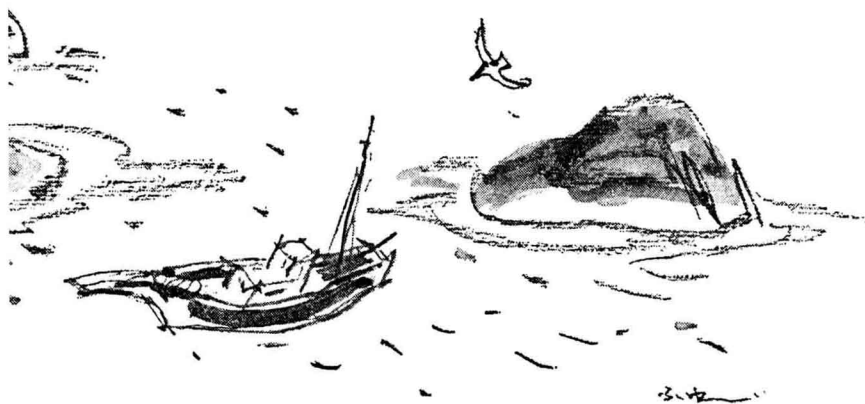
乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社営業部宛ご送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

ISBN 4-323-00899-6

もくじ ● ぼくが燃えてしまう ●



母の日の手紙	『アミーゴ』	冬の風	悲しいできごと	一回目の手術	ぬけがら	入院	青年の夢	白い病院	「はやく歩けよ」	心にかかる雲	足の痛い思い出
88	80	72	65	57	51	44	37	29	22	15	7



雨の修学旅行^{しゅうがくりょこう}

95

三回目の手術^{しゅじゅつ}

103

ひまわり

109

かあちゃん、ごめん！

116

広いところへ

125

鉄棒^{てつぼう}からおちた少年

134

まぼろしのドラマ

142

春の海

150

あこがれ

158

弟

168

秋ばれの城^{しろ}の上

175

あとがき

186



岡本文良・作

ぼくが燃えてしまう

山中冬児・画



Ⅰ 足の痛い思い出

（あれは、一年生のときだったかなあ？ 二年生のときだったかなあ？）

勝郎は、そのことをよくおぼえていません。

（春だったかなあ？ 夏だったかなあ？ それとも、秋だったかなあ？）

そのことも、よくおぼえていません。

でも、広くて青い海を、勝郎ののった船が、ざあざあと白い波をけたててつき進んでいったことだけは、はっきりと思い出せます。

きらきらきらきら——、まぶしく、日が照っていました。

船は、とうちゃんの金比羅丸でした。七トンの大きさで、長さが十メートルぐらいありました。

とうちゃんは、操舵室の中でかじを取っていました。日やけた顔が、きりりとして、

たのもしそうでした。

勝郎は、じいちゃんのひざにだかれて、へさきのところにすわっていました。

すぐうしろの甲板には、ばあちゃんと近所の人たちがのっていました。みんな、気もちよさそうに、風にふかれていました。

（船って、いいなあ。）

勝郎も、思いました。

船は、勝郎がこうして歩かないですわっていても、すいすいと海の上を運んでくれます。毎日、学校へいくときのように、足の痛い思いをしなくてすみます。

とうちゃんか、かじを自動に切りかえると、みんなのところへきて、たのしそうに話しました。でも、声がうしろに流されてしまつて、勝郎のところにはとどきません。

勝郎には、じいちゃんが話してくれました。

「これからいく島は、金華山といってな、古い神社や灯台があるんだ。だから、漁師はみんな、安全に漁をさせてくださいってお参りにいくのさ。じいちゃんもな、勝郎のとうちゃんか、まだちっちゃいころ、こんなふうにしてつれていったよ。」

「金華山には、サルやシカもいるんだろ？」

「うん、いるよ。でも野生だから、島の奥にしか住んでいない。勝郎にも見られるといいけどな。」

じいちゃんは、そういうながら、足首が外がわに曲がついている勝郎の足を見ました。

遠くに、金華山が見えてきました。とうちゃんは、また操舵室にもどってかじを取りました。

金華山は、こんもりした緑の島でした。船つき場から長い石段がつづいて、ひんやりした緑のトンネルになっていました。その先に神社があるという話です。ほかにも島にきた人たちがいて、その石段をのぼっていました。

「勝郎、のぼれるか？」

じいちゃんが、心配そうな顔をしました。

「だいじようぶだよ。のぼれるよ。」

勝郎は、そう答えて、ひそかにほかの人たちの目を気にしながら、一段一段のぼり出しました。

左の足首が折れ曲がついて、足のうらが地面につきません。そのため、くるぶしの下の部分をつけて歩きます。

やっぱり、だんだんと、くるぶしや足の甲が痛くなってきました。石段では、からだをもちあげるためのよいきな重みが足にかかるので、痛みがふだんよりもひどくなります。

勝郎は、なん度も立ちどまって休みました。

「勝郎、おぶってやろうか？」

とうちやんがふり返って、まっていた。

「だいじょうぶだよ。ひとりでのぼれるよ。」

勝郎は、また負けん気を出して答えると、ひとりでゆっくりゆっくりのぼり出しました。とうとう神社につきました。やったあとと思つて、うれしくなりました。

神社にお参りした人たちが、そのうらの森を通つて、灯台やサルやシカを見にいきました。しかし勝郎には、そこまでいくのはとてもむりでした。

（ぼくも、足がじょうぶだったらなあ。）

勝郎は、内心そう思つて、くやしくなりました。

「わしたちも、ここまででいいよ。」

じいちゃんとはあちやんが、いっしよに残つてくれました。おかげで勝郎は、くやしさを忘れて、たのしい半日をすごせました。

夕方、金華山をはなれました。海と島かげが、夕日をあびてまっかにやけていました。それは、勝郎の心にもくつきりやきついて、サルやシカを見られなかったくやしさとともに、その後の忘れられない思い出となりました。

足のことの原因で忘れられなくなった思い出は、まだほかにもあります。

やはり一年生か二年生のとき、勝郎は、かあちゃんにさんざんしかられました。理由まではおぼえていませんが、おそらく、いけないことをしたからでしょう。

でも勝郎は、自分がいけなかったことなどは忘れて、ただ、しかられたことだけを、がまんできないくらいくやしく思いました。そこで、家を出てしまおうと思ひ立ちました。

『かあちゃん、ぼく、家を出ていく。』

紙切れにそう書いて、ちゃぶ台の上におくと、ランドセルにいろいろな物をつめて家を出ました。電車にのろうと思つて、国鉄の駅のほうにむかいました。

いそいで歩いたため、いつもより早く足が痛くなってきました。しだいしだいに歩く速度がおちて、その分だけ心細くなってきました。そのうちに雨がふり出して、ますます心細くなってきました。駅についたときには、電車にのろうという気が、もう空気のぬけた風船のようにしぼんでいました。

勝郎は、またとぼとぼと家のほうに歩き出しました。坂をのぼると、家が見えてきました。

すると、しかられたくやしさが、また雲のようにわいてきました。ぜったい帰ってやるものかと思いました。

勝郎は、道をはさんで家とむかいがわになっている畑の中にはいました。畑と畑のさかいに、低い木のかきねがありました。かがみこんで、その下にかくれました。

雨が、大ぶりになってきました。すっかり、ぬれました。でも、そのままかくれていました。

かあちゃんは、とくに勝郎の書いた物を読んでいます。はじめはおろおろしましたが、そのうちにむかいがわの畑のかきねの中にかくれている勝郎に気がつきました。思わず笑ってしまいます。

（ほんとうに、強情な子なんだから。すこし、こらしめてやろう。）

かあちゃんは、そ知らぬふりをするのにしました。

雨がやみそうありません。勝郎は、ずぶぬれです。でも、まだ動きません。かあちゃんも、そ知らぬふりです。長い時間がたちました。



じいちゃんが、どこからか帰ってきました。じいちゃんは、かきねの中になにかいるのを見つけて、そばにいつてみました。

「なんだ、勝郎じゃないか。」

びっくりしながら、でもそのうちに、ははーんと思いました。

（また、かあちゃんにしかられて、とび出したんだな。）

勝郎を見ながら、そうして笑いました。

「勝郎、だれかとかくれんぼをしてるのか？　でも、この雨じゃ、鬼は帰ってしまったよ。」

じいちゃんは、勝郎を立てて家につれて帰りました。勝郎は、口をとがらせて家の中にはいりました。

（ふん、足さえ痛くなかったら、帰ってきてやらなかったんだぞ。）

そう思って、そうっと、かあちゃんのほうをぬすみ見しました。